

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	価値応答とは何か
Author(s)	隅原, 聖子
Citation	HABITUS , 22 : 83 - 93
Issue Date	2018-03-20
DOI	
Self DOI	10.15027/45626
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045626
Right	
Relation	



価値応答とは何か

隅 原 聖 子

(広島大学大学院文学研究科博士課程後期)

はじめに

他者の苦しみや喜びを、人が＜私＞のこのように感じたり感じなかったりするのなぜなのか、また他者の苦しみを「感じる」ことと、他者のために「行動すること」がいかなる関係にあるのか。それが長年にわたる私の問いである。そこで本論文ではディートリッヒ・フォン・ヒルデブラントの『キリスト教倫理』¹⁾の中の「価値応答Value Response」という章をその糸口として、価値を認識し応答することがいかなることなのか、人や時によってそれらが異なるのなぜなのか、を探ってみたい。

1. 応答の様相

意識的な生活領域でなされるものは、志向的経験と非志向的経験である。「志向的intentional」というとき、人と対象との意識的、合理的な関係を指し、私たちを動機づける原因についての知識を本質的に前提とする。²⁾たとえば確信についていえば、確信そのものは存在せず、必ず何かについての確信であって、対象の側の何かに対する意識的な、意味のある志向的關係を含む。これに対して、疲れる、悪い気分などの単なる状態は、このような関係を含まない非志向的経験である。単なる状態は、意識的な有意味な仕方それらの原因と結びついておらず、単に身体的な因果性を含むにすぎない。

志向的経験には、認識作用と応答の二つがある。³⁾広い意味での知覚は、認

識作用に属する。認識作用は、見ること、聞くこと、触ることなどのような感覚的な知覚のみならず、空間感覚、物質的な身体感覚、価値感覚、そして知的な本質直観をも含んでいる。感覚においては全内容が対象の側にあるので、私たちは空虚である。たとえば私たちが赤色を見るとき、赤という内容は対象の側にあり、私たちが持つのは赤ではなく、赤についての意識である。一方、応答は確信、疑い、希望、恐怖、喜び、哀しみ、熱意、憤り、尊敬や軽蔑、信用と不信、愛と憎しみなどである。これらの内容は主観の側にあつて、主観から対象に向かう。この応答には3つのタイプがある。すなわち確信、疑い、期待のような理論的応答、厳密な意味での意志的応答、喜びと悲しみ、愛と憎しみ、恐れと希望、尊敬と軽蔑、情熱と憤りのような情緒的応答である。⁴⁾理論的応答は事実を前提にし、私たちの知識がどの応答を与えるべきかを規定する。この応答は、知覚、推論、知的直観、気づきのような認識作用を前提とし、その対象の「現実存在」や「本質存在」に対して確信、疑い、期待を示す。意志的応答は、まだ存在していないものを現実化しようとする応答である。意志のみが私たちの身体に志向的に作用することができる。意志は人間精神が織りなす命令を可能にする。ここで問題となるのは私たち自身の活動を通して対象が現実化されることである。情緒的応答は、意志的応答とは異なり、私たちの命令によって生じさせることができない。情緒的応答はいわば「私たちの心の声 voices of our mind」である。⁵⁾この応答には、主観的な満足もしくは不満足によって動機づけられるものと、人格が客観的な善によって動機づけられるものがある。客観的な善によって動機づけられる応答は、尊重、崇拝、賞賛などである。たとえば感謝は私たちにとって客観的な善に対する典型的な応答である。

もとより影響されること(being affected)も応答と同様に、対象認識を前提にする。しかし、私が対象から影響されるとき、私は対象から何かを「受けとる」。すなわち、影響されることは対象から私への「求心性」を有する。これに対して、

応答では対象認識に基づいて、私は対象に何かを「与える」。すなわち、応答は対象の本性に語りかける「遠心性」を有する。この点では単に主観的に満足しないし不満足にさせるものへの応答も同様である。主観的に不満足にさせるものによって動機づけられる応答タイプは、ねたみ、嫉妬、復讐に対する欲望などである。これらは何かがある仕方で主観的に不満足なために起こる。ところが客観的な善、あるいは有意義性に基づいた応答は、主体が応答の動機となる客体に帰依(self-abandonment)しようとする動き、すなわち美や貴重さなど対象の本性に適合しようとする動きである。この善の知覚は、色や音の知覚と異なり、より深い悟性とより高い叡智性の知覚である。

2. 客観的な善によって動機づけられた価値応答

価値応答は私たちの価値に対する「位置設定a position of our free personal center」である。⁶⁾価値応答はある意味で食欲や衝動に類似する。しかし後者は本質的内在性を含み、前者は超越性を含む。食欲や衝動は、自己欲求の充足と緩和を求める衝動、すなわち単に主観的に満足させるものによって動機づけられた応答(たとえば、ある良い食べ物に対する激しい私の欲望)であって、自己中心性から逃れられない。これに対して、価値応答はそれ自身において有意義なものへの応答である。これは価値への帰依であり、自己の超越性(transcendence)、究極的には絶対者への関与や神「との対話dialogue with」を志向する。価値を意識することは価値界における人の独創的で決定的な関与である。「命令されるもの」は、善そのもの、無限の善、神への帰属である。神「との対話」は人格にとって本質的なもので、ここにおいて価値応答は最高潮に達する。価値への適合、つまり価値応答は、全人格に向かう神への愛をモデルとする。

私たちには価値をつかむ価値知覚も備わる。価値応答は、空腹に対する食事

のような衝動を鎮静させる目的論的な応答とは異なる。価値応答は、対象認識のみならずその価値への気づき、つまり価値あるいは否定的価値の理解を前提にする。私たちの不正への認識は、まさに空間知覚のようなものとは異なる認識作用、あるいは対象への気づきのようなものとは異なる認識作用を含む。価値認識、すなわち価値を価値として理解することは、基本的に敬虔な態度と私たちの意志の正しさをすでに前提としている。価値認識なしに徳は存在しえない。

しかし私たちの利己的な関心は、しばしばこのような価値知覚を曇らせる。たとえば他者が私を裏切るときに、怒りが直接に他者に向けられる場合がそう。この怒りは私の自尊心が傷つけられたことによるものだが、これは単に主観的に不満足を与えるものへの応答にすぎない。その限りでは私もまた誰かを裏切るかもしれない。あるいは自尊心や世俗欲によって価値知覚が妨げられる場合もある。たとえば母性本能を鎮めるための看護師のケアや雄弁披露のための聖職者の演説などがそうである。⁷⁾ 重要なのは隣人愛や他者の苦しみや欠乏に対する真の同情であろう。しかし、このことは価値知覚が本来の認識作用ではないということではなく、私たちが価値をつかむ「意識」が存在するということを示している。本質的な知覚の特別なしるし、価値知覚があるということなのだ。価値知覚の内容は対象の側にある。しかし価値に影響されることにおいては、私の魂の中に内容(たとえば、私の精神のうちに経験する慰め)がある。価値が深く有意義な仕方ですの心に作用するという事実は、新しくて親密な価値との接触である。

善であろうとする根本意志は無限の善自体としての神への応答になる。主観的に満足させる応答は、その都度われわれの中のその都度違う中心点が影響されることであるが、価値応答の中心点は神への愛である。前者は主観的な満足という獲得を求めるが、後者は神への帰依を求める。日没の素晴らしさは自我

中心的な喜びではなく、「それ自体において有意義なものthe important-in-itself」への憧れであり、自己をその対象に委ねている感情であり、対象がになう価値への応答である。ここでは対象の価値が「規定するものthe principium」であり、われわれの喜ばしさは「規定されるものthe principiatum」である。⁸⁾

応答は当然価値知覚を前提とするが、価値そのものは私たちが知覚するかもしれないかに関わらずそこにある。とすれば、価値を価値として知覚するのは受け取る側の問題ということになる。ただここで、客観的な善を人はいつ知覚するのか、価値はどのような仕方で私たちに自己を現すのかが問われる。たとえば良心は、道徳的な反価値への関係に拘束される。何かを命じるにしても、禁止を破って何らかの行動を取るにしても、そのときに良心の声が語りかける。何らかの価値に従って意志が働くが、その基準が問われるときに良心の声に語り掛けられる。たとえばある工場の建設がその地域の住民の雇用につながるが、それによって公害を生み出す可能性があるようなとき、雇用につながることは善であるとして建設に賛成するか、広い目で考えると環境を破壊しないことを選ぶのかという問題に直面した時などである。

3. 身体と価値応答

私はこれに加え、＜私＞という身体状態を挙げたい。私の知り合いに、度重なるつらい出来事に一時的に見舞われた人がある。その人は、それらの出来事から数年経たときに、春の景色の美しさに気付いたことで、心の回復を自ら知ったと言っている。春には花が咲き、空気は潤い、鳥や虫たちの活動が始まる。そこに価値は前からあったが、影響され応答する力がしばらくの間その人には不十分だったと思われる。あまりに強いショックを受けると、人は外界から遮断された状態になる。価値応答から最も遠い状態に陥る。逆に、楽しいことがあったときや、暖かいときや、おいしいものを食して、なにかしら充足感を持

価値応答とは何か

つときは、価値応答がしやすくなる。美しい朝日がそこにあっても、頭痛がするときには頭痛の方に心が奪われるが、軽いランニングの後では美しさに心が動かされやすくなる。このように身体状態で価値応答も変化してくると考えられる。もっともそのような身体に左右される価値応答は真の価値応答ではないのかもしれない。

ヒルデブランドは、価値応答は自己超越性、善なるものへの帰依だという。その意味を理解するために、正確に一致しないかもしれないが、ここでは「安堵」という表現を用いる。幼いころ養育者に守られていたときの肌と肌との触れ合いのなかに、身体が感じる心地よさや生きることのすべてが包み込まれる。それは養育者によって安堵が保障されるのに似ている。悪いことをすれば叱られ、心地の悪さを感じる。幼いころは理屈ではなく善いか悪いかで養育者から安堵を得たり得られなかったりする。この関係が、すなわちこの身体の感触が頭のどこかに残っているのではないかと思う。そしてこの感触を人は何かに求め続けているように思える。養育者の愛は神の愛に似ているのかもしれない。そして頭ではなく、体の感覚をとおしてそれを思い出すような機能を人は与えられているのかもしれない。

他者の喜んでいる顔を見ると快適な気持ちになったり、他者の悲しみを見ると不快な感情が起こったりするのは、影響や結果であって、志向的に影響された応答ではない。ここでは他者が問題となるよりも、それを見ることによって自分が不快にさせられるか否かが問題となるのである。あくまでも自分の不快な気分が中心であって、不快なものが目につかなくなれば他者は気にならない。確かにこれは志向的に影響された応答ではない。この快・不快の感情は情緒的応答であって、意志の力ではどうすることもできない。自らの苦しみのように他者の苦しみに応答するには、どのような態度をとるかが重要である。このように他者の苦しみに応答することは、神の声につき従うことなのだ。

ただ、ここに不思議な力を私は感じる。応答するにはまずその価値を知覚することが前提にされるが、何かに対して快・不快を感じるならば、すでに価値を知覚しているのではないだろうか。快・不快はどのような人間にも備わっている。これは神から平等に与えられたもののひとつだと思う。この感覚が私たちを刺激したとき、そこに意識は向かう。ある不快が私たちを刺激するとき、その内容は疲れだったり、悲しみだったり、怒りだったりする。ある快が私たちを刺激するとき、その内容はチェロの音色の美しさや、助けてもらったことへの喜びや、共感の嬉しさなどである。快か不快の刺激がなければ、それらは出来事や事柄といった単なる事実である。

快・不快は身体感覚である。そして感情は身体と密接に関係する。直接の触覚や聴覚ではないにもかかわらず、虐殺の場面をみたとき、嘔吐するのはなぜだろうか。悲しみでいっぱいするとき、食事ができなくなるのはなぜだろうか。確かに虐殺や悲しみは影響や結果の現れかもしれない。しかし価値にまず気づくように人の身体に価値知覚が与えられていると私は思うのだ。虐殺をあってはならないものとしてまず身体で知覚し、次の段階で虐殺を憎み、その防止へと行動するのだ。次の段階で自由な意志の働きが試されるので、虐殺を憎んでも何もしないということもありうる。

身体で感じることから価値知覚が始まるとするなら、その身体が生存を脅かされているような場合には、知覚は鈍くなる。逆に身体が快適な状態にあるときは研ぎ澄まされる。ゆとりのない生活、悲惨な出来事の連続、戦時下では、身体の存続は脅かされた状態となり、価値を知覚しにくくなったと思われる。

価値応答と欲求は共存しうる。価値の側から私たちに呼びかけるだけでなく、私たちもその価値の呼びかけにぼんやりと気づいている。そして価値応答は、応答主体が応答の動機となる客体の価値に帰依しようとする動きであり、このうちにそうあるべきであるという当為がひそむ。ここにおいて価値の客観的特

性との、意味豊かな共同の遊戯が形成される。

私は、価値応答が「安堵」に、すなわち肌と肌とが触れ合うときに身体が感じる心地よさに似ていると述べた。逆を考えてみたい。身体がこわばるなどの身体が受けつけないのは、どのようなときだろうか。反価値は求めているときに、というより求めているにもかかわらず遭遇する。それを反価値と認識するのは、価値の知覚力が私たちに備わっているからだ。

たとえば芸術の美は、作品に美が備わっているのであって、その美は私たちに感じとられるように備わっている。そして私たちはその美を感じ取る能力を与えられている。芸術作品がその美を感じ取るように私たちに要求し、私たちはその要求に応える。要求されるからには、ないものが要求されることはありえない。つまり、要求を感じ取る力はあらかじめ与えられているということである。

ただ、それは身体をもった人間に与えられている。身体で知覚し、応答するのだ。身体だけでは知覚はありえないが、身体なしには応答できない。私たちは身体を超えることができない。つまり痛みがあれば、ない時とは異なる判断をしてしまうし、異なる影響を受ける。さきの知人を例にすると、身体の痛みがあるときは、鳥のさえずりは騒音になり、花の美しさは痛みを決して感じることはない花への怒りとなる。身体を離れて知覚することはできないのだから、身体の調子が悪ければ、自ずと価値応答も異なってくる。身体の調子が悪いという段階を超え、命が脅かされるとき、応答の仕方はさらに変わってくると思われる。意志の自由を厳格に否定すれば、道徳性全体がただちに崩壊するであろうし、道徳的な善悪概念はあらゆる意味を失う。確かに身体に支配されているだけであれば、人間は犬や猫と何らの区別もつかない生き物になるだろう。ただ、私は身体の知覚を無視することはできないと主張したい。

私の知り合いに、頸髄損傷のため、人の手を借りないと食べることも排泄す

ることもできない人がある。その人は、津波などの危機的な状況に立たされた時、自分が置いていかれることを知っている。今は、介護者に、私を置いてあなたの安全を優先してほしいと言っている、このような危機的な状況のとき、どのような態度に出るかわからない、きっと本性が出てくるだろうから、という。死を身近に自覚しているからこそ、他者も自分もその時その場に立たなければ、身体がいかなる価値を知覚し、いかなる「位置設定」で判断し、身体にいかなる命令をするのか、また価値応答がどこから湧いてきて、どのように人に命令するのかわからない。

ヒルデブランドは価値応答そのものについて述べているので、私の解釈は行き過ぎなのかもしれない。ただ、価値応答を可能にするのは、最終的に私たちの意志の自由である。ではこの「自由」である意志は何によって保証されるのであろうか。意志も価値を知覚するのも身体をとおしてであり、その身体に縛られていると考えられる。

結語

福祉に携わる者は、目の前で起きていることや、苦しんでいる状況に身体が影響されて、結果的に価値に気づく必要があるかもしれない。障害のある人に差別的な環境があれば、それを解消しなければならない。確かに誰もが生きやすい環境をつくることは正しい。これは理論的応答であり、価値応答とは異なる。障害者を虐待してはならないし、誰もが安心して暮らせる社会にすべきだ。これも正しい。しかし、この正しさだけでは意志的応答に結びつかない。価値応答にも注目すべきだと思う。私にはヒルデブランドの「神に対する純粋な価値応答としての愛」がまだ理解できずにいる。これを理解することで少なくとも虐待などという言葉が死語となることを期待している。奴隷という言葉が死語になったように。

註

- 1) Dietrich von Hildebrand, *Christian Ethics*, New York, 1952.
- 2) Cf. *ibid.* p.172.
- 3) Cf. *ibid.* p.177.
- 4) Cf. *ibid.* p.179.
- 5) Cf. *ibid.* p.184.
- 6) Cf. *ibid.* p.184. このドイツ語はStellungnahmeである。なお、この訳語については浜田恂子氏の著書から拝借した。『価値応答と愛』八千代出版1982年24-30頁参照。
- 7) Cf. *ibid.* pp.201-202.
- 8) Cf. *ibid.* p.32.

What is Value Response?

Seiko SUMIHARA

Graduate School of Letters (Doctor's Degree Program) Hiroshima University

In this paper, we consider the meaning of value response according to the theory of Dietrich von Hildebrand. There are three different basic types in the realm of responses: theoretical, volitional, and affective responses. Among them, only volitional responses can act intentionally on our bodies. Unlike volitional responses, affective responses are not caused by orders. These affective responses are motivated either by mere subjective satisfaction or dissatisfaction, or by the objective good for the person. We possess perceptions that can understand values. The value response presupposes not only knowledge of the object, but also awareness of its value. The value object calls up on us, and we are also vaguely aware of the call for that value. The value response is a movement wherein a responding subject abandons itself in favor of the value of the object as its motive. The obligation of what we should do is involved in such value responses. For value responses, it is presupposed that the responder is aware of the action. However, if we feel pleasantness or unpleasantness about something, we may have already perceived its values. The consciousness follows the sense stimulus. It seems that humans developed value perception in order to notice values; a human body perceives values and responds to them. We cannot ignore physical perceptions even though the value perception does not result from physical activity in our bodies.